

## 《講演要旨原稿の書式》

横 100 mm, 縦 150 mm に納まるように作成してください。

文字サイズは 10 pt 以上 12 pt 以下としてください。

例えば以下のページ設定 (A4 縦) のもとで、以下の通り設定すると、所定のサイズになります。

余白：上 75 mm, 下 72 mm, 左右各 55 mm

一行字数：27 文字, 行数：27 行

フォント (和)：MS 明朝 11 pt, (英)：Times New Roman 11 pt

- 1) 著者名とタイトルの間はコロン“：”とする。
- 2) 共同研究の場合は、演者の左肩に“<sup>○</sup>”をつける。
- 3) 著者名：タイトルと本文の間は 1 行空ける。
- 4) 共同研究で研究者の所属が異なる場合は、“\*”記号で区別する。
- 5) 所属名は公式な略記を使用する。

### 《講演要旨原稿の書式見本》

°大塚泰介\*・有田重彦\*\*：八幡湿原（広島県山県郡北広島町）の珪藻

八幡湿原は、北広島市の八幡高原に点在する中間湿原の総称である。中間湿原を代表するヌマガヤ□マアザミ群集は、八幡湿原の研究に基づいて命名された。ただしその中には、湧水湿原と谷湿原が混在しており、また泥炭の堆積程度も湿原によって大きく異なる。

水源や泥炭堆積の程度が異なる4つの湿原、6つの調査地点で、2012年11月18日に調査を行った。陸上のオオミズゴケ、水中の枯死した植物、底泥など、その地点の代表的な付着基質から2試料ずつ、計12試料を採集した。

電気伝導度 ( $3.6\text{-}3.9\text{ mS m}^{-1}$ )、pH ( $5.9\text{-}6.6$ )、溶存態リン濃度 ( $0.04\text{-}0.11\text{ }\mu\text{mol l}^{-1}$ ) については、地点間の違いが小さかった。溶存態窒素濃度は止水と流水で大きく異なり、止水の4地点では  $5.6\text{-}8.9\text{ }\mu\text{mol l}^{-1}$  の範囲だったのに対して、流水の2地点ではそれぞれ  $43.9$ 、 $53.2\text{ }\mu\text{mol l}^{-1}$  の高値を示した。

オオミズゴケ上では湿原ごとに優占種が異なり、*Aulacoseira alpigena*、*Eunotia compactata*、*Fallacia vitrea* が優占種となった。止水中の植物遺体上では *A. alpigena* あるいは *Frustulia saxonica* が優占種となった。泥炭堆積が見られる長者ヶ原湿原の底泥上では、*Brachysira brebissonii* が優占種であった。流水中の植物上（枯死体およびびでは、*Diatoma mesodon*、*Eunotia minor*、*Fragilaria gracilis* が優占種となった。

(\*琵琶湖博物館, \*\*たんさいぼうの会)